

資料紹介

京都大学文学部国語学国文学研究室蔵

『まぼろし草』——紹介と翻刻——

小山 順子

ここに紹介するのは、京都大学文学部国語学国文学研究室蔵の「まぼろし草」と題された歌書である。本書以外には存在が知られていない孤本である。女流日記もしくは私家集と呼ぶべき内容を持っているが、『国書総目録』に収載され「和歌」と記されているものの、内容についてはこれまで紹介されていないようである。全五十二首の和歌を収めるが、『新編国歌大観』に収載されていない。また、近年出版された石原昭平他編『日記文学事典』（平成十二年、勉誠出版）にも立項されていない。

それというのも、本書は何故か仮名草子の分野に分類され配架されており、そのため日記・和歌研究者の目に触れる機会がなかったからであると思われる。過日、仮名草子の悉皆調査を手がけていた林泰弘氏が本書の存在を教示して下さったことを契機として、書誌解題を付して翻刻を今回紹介することができた次第である。

題は、外題「まぼろし草」、1丁表に扉題「まろが夢」とある。内題を題とする方が適当であるかもしれないが、

本書の末尾の跋文に、「たゞとにかくにかたるもいふもまぼろしの草のうへなるつゆよりもまだはかなきものがたり」とあり、「まぼろし草」が本書の主題を表す詞であるので、これを仮に題とした。

〈書誌〉

京都大学文学部国語学国文学研究室蔵（Pb/67）。袋綴一冊。縦12・5 cm、横18・0 cm。緑灰色に金で草花文様が描かれた紙表紙、中央に外題「まぼろし草」と打付書する。表紙見返しは金色。1丁表に扉題「まろが夢」。墨付二十六丁。近世前期写。

〈解説〉

本書は大きく、序文（1ウ↘2ウ）・恋愛（3オ↘5オ）・嵯峨隠棲（5ウ↘10ウ）・紀行（10ウ↘13オ）・和歌（13ウ↘24オ）・跋文（24ウ↘26オ）の部分に分けられる。末尾の跋文に、「たゞとにかくにかたるもいふもまぼろしの草のうへなるつゆよりもまだはかなきものがたり、かくまでそめしことの葉はみなさるなさけのみちや、しり給ふ御かたの、こいちゆへ身をすて給ふがあわれなる事なりとかたり給ふゆへ、いかなるさまなるぞとたづねぬればこまぐとかりぬるを、そのまゝにかきとめつゝものこしぬる。すゑの世にもなりなば、いまがむかしの花ざかりぞか

し」と、自分の恋愛、そしてその恋愛の破局ゆえに身を捨てるに至った物語を語ったところ、それを書き留め残すよう「しり給ふ御かた」に勧められて書いた、と述べられている。また「いろしこのむはなかく」に、和歌の道に心をよせしとや」(3才)「げにいにしへのこい草のまだのころは、和歌のはしなれば」(6才)とあり、地の文にも和歌修辞が多用されている点などに、筆者の和歌に対する高い関心が表れている。それゆえ本書には、自らの人生を書き留めるだけではなく、自詠をまとめて残すという意図があったことが窺われる。

本書の筆者については未詳である。「さりとともすがたはかずならぬしづのうき身になすらへ、わかくて中原にかりにるにける」(3才)とあるように、宮中の女官や、高位の人物の家に仕えた女房ではないらしい。書かれている事柄は私的な範囲を出ず、時代背景が描かれているのは、わずかに新帝の即位に際して世間が慌ただしくなるという箇所(10才・ウ)のみであるのも、本書の特徴である。

登場する人物名について見てみると、「円照法皇」(3才)は、歴史上に認められない名称であり、仮名による體化表現と考えられる。また、作者の恋人であった「高辻の何がし殿の御内子」も、高辻菅原家の誰かという以上の比定は困難である。また「三条右大臣」(4才)の名も見える。三条家で右大臣になった人物は数多いが、十四世紀以

降(理由は後述)で、「御女いまだ内侍所にたゝせたまわで」とあるように、内侍所(東宮妃)に立った息女がいるという条件を満たす人物は認められない。これも仮名である可能性があり、いずれも時代や個人を特定するに至っていない。

なお、収められている和歌は、『新編国歌大観』と重複しているものはなく、未見のものばかりである。本書の和歌表現を見てみると、中世以降の和歌に一般的なことではあるが、先行する和歌から表現を摂取して詠み込んでいる。その中で注目されるのが次の歌である。

44 すまの浦もしほやきぬるはま人も月にはさのみうらみ
ざらまし

この下句は「身のうさをうれへあはする友もあらは月にはさのみかこたざらまし」(『玉葉集』雑五²⁵⁰¹従三位房子、月前述懐といふことをよみ侍りける)の表現を摂取していると考えられる。従三位房子は、永福門院の生母従一位顯子の妹であり、内大臣源通成女である(岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈 別巻』平成八年、笠間書院)。「玉葉集」のみに二首が入集する歌人で、玉葉時代から見ると、およそ一世代前の歌人であると推測される。この²⁵⁰¹番歌の出典資料は不明であるが、本書の筆者が表現を摂取したのは、勅撰集である『玉葉集』からである可能性が最も高い。この点から、本書の成立は少なくとも玉葉時代、すなわち十

四世紀前半を遡るものではないと考えられる。

本書の内容を見てみると、『十六夜日記』や『とはずがたり』等の中世女流日記や紀行文と比較して、本来ならば重要であるはずの紀行部分の記述が、あまりに薄弱である感は否めない。10丁表から紀行の記述が始まり、逢坂関を越え、比叡山を見ながら近江国に入り、三上山で行き会った旅人と贈答歌を交わす。その贈答歌の後、すぐに相模国と伊豆国の境にある塩汲浜で庵を結んで住居としたとある。相模国に至るまで、東海道の名高い歌枕は数多くある。作者は嵯峨に隠遁した折にも「げにいにしへのこい草のまだのこるは和歌のはしなれば、さがのめい所のかずくをかくて筆をそめ」(6才)と記しており、歌枕には高い関心を抱いていたことが窺われるから、旅の途上で歌枕を実地に見聞する機会があれば、それを記さないはずはないと思われる。その点から、東海道の名所に関する記述がなく、いきなり相模国に庵を結んだという記述になるのは不審である。この間に書写の過程で落丁がある可能性もあるが、東国を詠んだ歌が、19番・20番ともに『伊勢物語』一二段で有名な武蔵野を詠んだもののみであることも合わせて、東国に庵を結んだ事実は疑わしい。18番に「しほぞくむ……」とあり、19番・20番に武蔵野を詠んだ歌を置くにあたって、庵を結んだ場所を相模国の塩汲浜と虚構したのではないかと考えられる。なお、18番から51番歌までは、まとまって

和歌が並べられているが、ここに表れる歌枕は、武蔵野以外は、有馬山・明石浦・播磨湯・住吉浦・須磨浦・春日・吉野山・御裳濯河と、畿内の歌枕である。少なくとも嵯峨に隠遁したこと、近江国の三上山まで旅をしたことは事実かもしれないが、それより他の歌枕詠については、筆者の虚構もしくは単なる歌枕を詠んだ和歌と考えられる。18番から51番歌までの和歌の配列は、紀行として地理上の配列に対応させているのではなく、季節の経過に従って歌を並べている。秋から冬、年を越して春夏、再び秋へと、世を捨て孤独に身を置く筆者の心情が、季節に添って浮かび上がる配列になっている。3番から13番までの、嵯峨隠棲の折の詠歌も、別れた恋人への絶ち難い恋情と、はかない我が身の行く末をかこつ心情が通底している。本書の和歌には、我が身のはかなさや孤独を自省する姿勢が一貫して見られる。

本書は墨付二十六丁、和歌五十二首の短いものである。

日記として見るとき、恋の顛末や出家するに至る経過の描写が短く、心理描写が通り一遍であることは否めない。しかし、現在残っている著名な女流日記の背景には、無名の女性によって書かれた日記が、無数に存在していたであろうことは想像に難くない。本書は、そうした現存しない女流日記の冰山の一角として、幸運にも現在我々が目にすることができた興味深い資料である。

〔翻刻〕

凡例

・ 通行の字体に統一した。

・ 和歌にはわたくしに通し番号を付した。

・ 濁点・句読点はわたくしに付した。原本に濁点がある場合は、傍線を付して区別した。

まろが夢」(1オ)

夢の世とはいひながら、物をもふころはかぎりなき物ぞかし。つらくとこの身のかぎりなきをよそにかたらんもいとほしたなく、ねざめがちなる夜半にのみひとりかこつにこそ、たもとをしぼるいとまこそなけれ。かくてすぎなんもかしこからず、あるは人の心もはかられて、ことゝの葉にはつゝめども、いろにやはみゆらんとこそ思ふむかしも、かゝるためしも」(2オ)ありけるにや、いろをもかをもしる人ぞしるとは、げにやんごとなきことゝの葉ぞかし。」

(2ウ)

比はなかむかし、円照法皇の御代にあたりにける。いろしこのむはなかくに、和歌の道に心をよせしとや。さりとますがたはかずならぬしづのうき身になずらへ、わかかくて中原にかりにぬにける。あるゆふぐれのおぼるなるに、それとは何かゆふしづの、いともやんがたきありさまなり

しを、かた」(3オ)はらなるひそかに人にたづねぬるに、あれこそ音にもきゝやしぬらん高辻の何がし殿の御内子と、さもみつやかにかたりつゝ、つばねの戸ぼそをさす月に、

1 秋の夜のくまなき月のかげなればくもみの袖はかぎりしられず

となんうちながめぬれば、かすかに黒水の音して聞ひければ、」(3ウ)

2 あきの夜のくまなき月はなれぬれどまだしゆかしき春のくれ哉

後にこまぐとたづねぬれば、三条右大臣の御女いまだ内侍所にたゝせたまわで、すみかちかくにおはしましけるを、たゞ人と思ひしるはかなくぞき」(4オ)こへし。

さくしかのおのこすみ所もとめつゝ、同じあたりのわらやにすみるにける。其やどりにむかしは名のみなれぬる女ありけり。なさけのいとのかくくに、心のきの按けき、またうぐひすの音をまちて、もの残る心ちなんしけり。され人めの関」(4ウ)のおそろしく、さすがにかたりもやらずありけるを、いろやそみぬるすがた見の鏡のかけもなならず、いつしかにあひはなれぬれど、はまのまさこのかすくもつきせぬことの葉をあらばあかす折もあらず、たゞうつらくとすぎ行まゝに、かくて二とせのあまり、あかしくらしにけり。」(5オ)

たなばたのとしにのとせのわかれより、はや二とせの秋ぞかなしき。うちゑいじつゝこしかた行すへをおもふに、こゝろはかなき身とはいひながら、いまうちすてし世のさまを、いかゞはせんとなくく心をとりなをしつゝ、おもひをきりてさがの奥石はまといふ(5ウ)ところにしはのとぼそかたくして、げにいにしへのこい草のまだのころは、和歌のはしなれば、さがのめい所のかずくをかくて筆をそめ、

3 おぐらやまみねの紅葉の心あらば我が行ゑのいろをま

ぜかし(6オ)

4 かも川のはやきながれの川水もわかでぞかわる瀬瀬の
あじろ木

5 はかなきをさとれとのみか桜てらちりなん後はいかに
せよとて(6ウ)

6 もとめ行まろがすみかの木ずへさゑおのれくにいる
をかへぬる

7 ながれつゝすへをいづくの浦おぶねこぎ行あとをとふ
人もなし(7オ)

8 たのめどもたれとはなしに人や我身代にしはさもあら
ばあれと

9 恋すてふさはさりながらかゝる世にいづくもおなじす
みかなりけり(7ウ)

10 みくま野のほどしはとをくありぬれどきみがありかの

さもあらずして(8オ)

11 ひとり来てご世のちぎりはかぬぬれどさだめやらずに

おなじすみかと(8ウ)

12 高瀬川はかなきまゝにきゝぬれどひとりとへればたの

みありつゝ(9オ)

13 うぐひすの音をのみきけばいつもたゞ春にすみぬる心

ちこそすれ(9ウ)

となんゑいじつゞけぬるほどに、つながぬ月日おのづから
はや秋も暮、木々のすへくも冬がれの色もあらはになり
ぬれば、今ははや比春宮の御在宇なりしかば、嵯峨のほと
りもうき世の里なれば、物さわしくなりぬれば、げにいに
しえの春宮なぞの御はらひときゝぬれば、(10オ)とをき
はたうものぎ来て、よそながら絆しぬれど、いまは世を
すて人のまなびなればよしなし。いざさらば、いづくぞた
づねゆかんと小ぶねの東海道の心ざしはるぐと行。これ
や此ゆくもかへるもわかれてはしるもしらぬにおなじ名の
あれとぞ音にきゝぬれ、いまはまだ目のまへにみゝへぬ
るひゑの(10ウ)山おろし、いとゞしく王城の鬼門のま
もりぞとふしおがみつゝゆくほどに、かぎりしられぬ水の
おも、幾世かねぬる白菊の今はおち葉のいろくゝなにした
とへん。朝雪をわけつゝゆけば、しる人もまれにあふみの
里くゝをすぎぬるまゝに見かへれば、とほくも来ぬるもの
かなと思ふも、はやきまよひぞと(11オ)心はるかにみ

かみや、これもかぎりはありぬると、

14 みかみやま立よる影はかわれどもみねの松しは千代を
こめつゝ

また道行人のやすらひ、ふじのけぶりのたつにまがひけるものかな、心ありげにいふをきゝて、(11ウ)

15 心あてにふじにまがわばみかみ山まるが思ひのけぶり
くらべん

となんうちゑひじぬれば、かの旅人、袖をひきつゝなさけやしりし、しろしめさば世をすて人にはいかにぞや心あてにとあらばくらべ見よとの筆にやと、(12オ)

16 わけゆけばいづくもおなじおもひなるを心あてにはい
かでくらべん

とありぬれば、まろもそのまゝにしもおきやらず、

17 山がつもおもひはおなじありそ海わけてぞそむるなが
袖のつゆ(12ウ)

ゑいじぬれば、あわれとやおもひけん、袖おほひつゝわか
れにけり。

やうくたどりゆく程に、さがみの国、あなたはむさし、
こなたはいづの国のさかひなるしほくみはまのかたわらに
つきぬれば、あかさでとこそまでとのすみかなれど、たか
き所いほりひきむすびつゝおこなひすましありに(13オ)
ける。

18 しほぞくむ我いにしをもかくまでにぬれにし袖をほし

もやらずに

19 むさし野のはてしをとはんまでしばしうちよるなみに
やどる月影(13ウ)

20 ふる雪につまもこもれる若草もいづくしられぬむかし
がたりよ

21 みな人のころのはてはなかくにかゝる霜夜をとふ
人もなし(14オ)

22 山路行く我袖やどすしら雪にまたさまかゆる心ちこそ
すれ

23 さと遠み野辺の草葉のいとゞしくなをすぎがてのこと
やたづねん(14ウ)

24 世の中はとにもかくにもありあけのきもる月にしく
物ぞなき(15オ)

25 しらゆきはきゆる我身をしれとてかせきもゑらばずや
どりきへぬる(15ウ)

26 とけぬらん谷のこほりのけさはまたなくやさだかにう
ぐひのこゑ

27 ありま山みねのしら雪けふはまた春まちわびてきへや
うせなん(16オ)

28 はるくればあかしの浦の千鳥さへ松のしらべにまがひ
ぬる哉(16ウ)

29 四方やまのかすみのころもはりまがた見へつかくれつ
うぐひの声

30 桜花むかしのいろはいかにぞやわれしながめはけふを
はじめに」(17才)

31 青柳のいとよりかいはなきさ行く船もかすみの衣きつ
ゝも

32 あかしがたおぼるの月もなをざりにかすがのしまをな
にかはせん」(17ウ)

33 我身ひとつにかぎりやはせんふる里もかゝるけしきの
はるやある」(18才)

34 みぎわなるかもめもけふは羽をのしてもやしのおん
すみよしの浦」(18ウ)

35 春の夜のま弓つき弓いるさきはねややまどいのともつ
かみてら」(19才)

36 春風はつまがあたりやさそひけん思わずふきしあとと
しのびて」(19ウ)

37 桜ちるこのゝら里に来てみればまたひきかへす雪のむ
かしに」(20才)

38 時鳥心ありげにつげぬるははるをわすれのかねごとや
かも

39 世をすてゝよし野の山もけふはまたきのふにかわる青
葉なりけり」(20ウ)

40 風そよぐみもすそ川のながれくむにこりにごらぬなつ
の夜の月」(21才)

41 秋や来る小篠の露はおのづから月のかげをやたづねし

るらん

42 紅葉するあし引山のけしきさへかのやま鳥もながく

し夜半」(21ウ)

43 くまぞなきこよひの月はなにめでゝいづくをゑるふか
たもある哉

44 すまの浦もしほやきぬるはま人も月にはさのみうらみ
ざらまし」(22才)

45 しら露も月にやまがふしのぶ野の人やとがめんむさし
野のはら

46 またの夜の名だかき月はいざしらず今宵を秋のものな
とやせん」(22ウ)

47 幾とせの秋のなごりはおほけれど今宵斗はいましばし
とも

48 小男鹿の妻こふ声もふゆくればいづくのはてのつまを
もとめて」(23才)

49 秋の夜は千代のためしにかたれどもあかつきいそぐ鳥
ぞ物うき

50 ゆくすゑは野辺のくさ葉となるとりもこよひかぎりの
月はかへまし」(23ウ)

51 つまがためしも夜の露もいとはねど心ひとつになりや
しぬらん」(24才)

あゝさてはかなきながら筆そめて、わすれがたみになり
やせん。いにしへはかゝるなさけもあり明の月せぬゑんの

かねごととも、または幾世のちかふことの葉も、みなく
筆のあしければ、世は」(24ウ)さだめなきものぞかし。
きのふまでそひしもけふよそにすみ、我いつわりはなけれ
ども、世にしたがへばおのづからみないつわりのたねとな
る。たゞとにかくにかたるもいふもまぼろしの草のうへな
るつゆ」(25オ)よりもまだはかなきものがたり、かくま
でそめしことの葉はみなさるなさけのみちや、しり給ふ御
かたの、こいちゆへ身をすて給ふがあわれなる事なりとか
たり給ふゆへ、いかなるさまなるぞとたづねぬれば、こま
かくとかたりぬるを、そのまゝにかきとめつゝものこしぬ
る。すゑの世にも」(25ウ)なりなば、いまがむかしの花
ざかりぞかし。

52 筆とめてかた見といへばいかゞせんかわらぬいろをた
のむ月かげ

とやせん」(26オ)

(こやま じゅんこ・研修員)